アブアブアブアブアブアア、立つてゐる事が出來ない。
野田の敷いてくれた毛布の上へうづくまつて、坐つてキツチリ合掌した。
自分の生は此處で終るのだ。
心臟の鼓動が石油發動船のやうな音を立てゝゐる。
パクリと前のめりに打つ斃れたら、それきり僕は動かなくなる。
自分の今までの考へや行爲は間違つてゐた。
やはりキリストや、釋迦の營んだ生活を習ふべきであつたのだ。
ダ、ダ、ダ、ダ、ダ、血、ダ、
次のダは續かない。
愈々瞬間後に僕の息は絶える。
たましひは上天する。
『野田君、淺野を呼んで來てくれませんか。淺野が來るまでに僕は死ぬか知れないが』